

閉会の挨拶

名古屋大学農学国際教育協力研究センター
松本哲男

2日間にわたる講演と活発な討論をありがとうございました。

今回「評価」を、私たちが第2回オープンフォーラムのテーマに据えたいきさつを申し上げます。本センターは昨年4月に設立され、1年半になります。ちょうど広島大学の2年後を追いかけているわけで、いつも広島大学は我々のいい先生であり、兄貴です。「農学」という名前をつけているところからも容易に想像できると思いますが、生命農学研究科というかつての農学部が本センターの親です。皆さんご存じのように名古屋大学農学部は、個々の先生は国際協力をおこなっているけれども、九大・農工大・東農大・岡山大などのように、学部として華々しい国際協力活動をしているところではありませんでした。そういう中で、名古屋大学に本センターが設立された時、私たちは皆さんに認知していただけるのかどうかということが問題になりました。とにかく招待状を出して、来ていただけるのかどうか。それが第1回目のオープンフォーラムでした。皆さんに出席していただいて、友好的な雰囲気「協力のニーズは何か」というところに焦点を合わせて討論し、センターはヨチヨチ歩き始めました。

次に何が私たちの課題になるのか。活動する以上、私たちはいろいろなプロジェクトの評価をする能力を身につけなければいけないだろう、これが非常に重要であろうと、この4月以後私たちは感じました。そのときには日本評価学会ができることを全く知りませんでした。評価は一体どなたが得意なのかもわからない中で、たまたま昨年の11月、私が本センターに赴任して1ヶ月後ですが、広島大学の第3回国際教育協力フォーラムに出席させていただき、牟田先生から評価の重要性についてのお話をうかがう機会がありました。私はその時まで評価ということが全然わかりませんでした。何故こんなことを言うのだろうと思っていたのです。先生の話をして、そのあと皆さんと飲んで怪気炎を上げ、翌日から「評価が大事だ。これを次のテーマにしよう」と個人的には考え、センターのスタッフに4月に提案し、今回取り上げさせてもらったわけです。

初め私は、本日の4つの議題に基づいて一つ一つ討論の中身を確認しようと思いましたが、そのことよりも、評価というものが今後いかに重要になっていくか、ということでもとめにしたいと思います。来年からは行政も政策評価を行なうと言っていますが、この2～3年のうちに評価ということが、もっとあたりまえになってくるのではないかと思います。

もう1つ視点を変えてお話をしたいと思います。第1回目のときはNGOの方々はこの席に座るのではなく、後ろの観客席に来ていただいたのですが、2回目はわずか1人でまことに申し訳ないのですが、同じテーブルに座っていただきました。そして広島の時も私は感じたのですが、NGOにとってJICAあるいは大学というと、たいてい一方的な非難の対象になって、頭が痛いと思っていたのです。しかし今日はそういう部分よりも、「やはりこういう時に専門家にいていただければ助かる」という話がでてきて、私もホロリとして、これは助かったな、という印象を持ちました。実際、働く分野が違うわけです。同じひとつの国際協力といっても、皆さんいろいろなところでいろいろなことをしている。私どもが掲げている中には、特に農学分野ですので、技術の移転という分野ももちろんあります。トップ技術の移転もあると同時に、ruralという言葉で表わされる、一番現場の農家を対象にしたものもあります。しかし、何といても大学が対象にするのは、相手が大学である場合が非常に多い。これがあたりまえのケースだと思います。しかし今後、私が思うには、この分野でNGOの方々や大学、NGOとJICA、JBICなどの組織が、もっとあたりまえのパートナー

になっていく。私どもはその道を歩きたいと思っています。そうした面で、第3回目のときはNGOからの出席者が複数になっていく、あるいは会議の半分を占めるかもしれません、そのようなかたちの道を私たちは歩んでいきたいと思っています。

とりとめのないまとめになってしまいましたが、評価の一つ一つのところではいろいろな意見が出て、大体の流れもできているように思います。ここで私がおかしなまとめ方をするよりも、皆さんが討論の中身を持ってお帰り願えればと思っています。

また、後程、講演された方、あるいは参加者の方に、我々の方からこれをまとめていくうえでの質問などが届くと思いますが、そのときは面倒がらずにお答えいただきたいと思います。

2日間お忙しい中を参加していただき、非常に実りのある討論をしていただきまして、私どもも勉強するところが多くありました。これを我々の血とし肉となるようにして、一人前のセンターを目指していくうえでの一つの機会にしたいと思っています。本当にありがとうございました。